

# 貧乏

幸田露伴

青空文庫



## その一

「アア詰つまらねえ、こう何もかもぐりはまになつた日にやあ、おれほどのものでもどうもならねえツ。いめえましい、酒でも喫くらつてやれか。オイ、おとま、一升しょうばかり取つて来な。コウト、もう煮にや奴こも悪くねえ時候だ、刷毛はけついでに豆腐とうふでもたんと買え、田圃たんぼの朝あさというつもりで堪かん忍にんをしておいてやらあ。ナンデエ、そんな面つらあすることはねえ、女おんなツ振ぶりが下したがらあな。

「おふざけでないよ、寝ねているかとおもえば眼めが覚さめていて、出しぬけに床とこん中ちゆうからお酒を買かえたあ何なんの事ことたえ。そして何時なんじだと思おもつておいでだ、もう九時くじだよ、日ひがあたつてるのに寝ねているものがあるもんかね。チョツ不景ふけい気きな、病人びやうにんくさいよ、眼めがさめたら飛とび起おきるがいいわさ。ヨウ、起おきておしまいてえば。

「厭いやあだあ、母かあちゃん、お眼め覚ざが無いなじやあ坊ぼうは厭いやあだあ。アハハハハ。

「ツ、いい虫むしだつちやあない、呆あきれつちまうよ。さあさあお起おツたらお起おきナ、起おきないと転ころがし出すよ。

と夜具を奪りにかかる女房は、身幹の少し高過ぎると、眼の廻りの薄黒く顔の色一体に冴えぬとは難なれど、面長にて眼鼻立あしからず、粧り立てなば粹に見ゆべき三十前のまんざらでなき女なり。

今まで機嫌よかりし亭主は忽然として腹立声に、

「よせエ、この阿魔あ、おれが勝手だい。

と云いながら裾の方に立寄れる女を蹴つけんと、搔巻ながらに足をばたばたさす。女房は驚きてソツとそのまま立離れながら、

「オヤおつかない狂人だ。

と別に腹も立てず、少し物を考う。

「あたりめえよ、狂人にでもならなくって詰るもんか。アハハハハ、銭が無い時あ狂人が洒落てらあナ。

「お銭が有つたらエ。

「フン、有情漢よ、オイ悪かあ無かつたらう。

「いやだネ知らないよ。

「コン畜生め、惚れやがった癖に、フフフフフ。

「お前少しどうかおしかえ、変だよ。

「何が。

「調子が。

「飛んだお師匠様だ、笑わせやがる。ハハハハ、まあ、いいから買って来な、一人飲みあしめえし。

「だって、無いものを。

「何だと。

「貸はしないし、ちつとも無いんだものを。

「智慧がか。

「いいえさ。

「べらぼうめえ、無えものは無えやナ、おれの脱穀ぬけがらを持って行きや五六十銭は遣よこすだろ  
う。

「ホホホホ、いい気なんだよ、それでいつまでも潜もぐっているのかい。

「ハハハハ、お手の筋だ。

「だって、後あとはどうする工。一張羅いっちょうらを無くしては仕様がなないじゃあないか、工、後です

ぐ困るじや無いか。

「案じなさんな、銭があらあ。

「妙だねえ、無いから帯や衣類を飲もうというのに、その後になつて何が有る工。

「しみつたれるない、裸百貫男一匹だ。

「ホホホホ、大きな声をお出してない、隣家の児が起きると内儀の内職の邪魔になるわネ。そんならいいよ買つて来るから。

と女房は台所へ出て、まだ新しい味噌漉を手にし、外へ出でんとす。

「オイオイ此品でも持つて行かねえでどうするつもりだ。

と呼びかけて亭主のいうに、ちよつと振りかえつて嬉しそうに莞爾笑い、

「いいよ、黙つて待つておいで。

たちまち姿は見えずなつて、四五軒先の鍛冶屋が鎚の音ばかりトンケンコン、トンケンコンと残る。亭主はちよつと考えしが、

「ハテナ、近所の奴に貸た銭でもあるかしらん。知人も無さそうだし、貸す風でもねえがと独語つところへ、うツそりと来かかる四十ばかりの男、薄汚い衣服、髪垢だらけの頭したるが、裏口から覗きこみながら、異に潰れた声で呼ぶ。

「大将、風邪でも引かしつたか。」

両手で頬杖しながら匍匐臥にまだ臥たる主人、懶惰にも眼ばかり動かして一ト眼見しが、身体はなお毫も動かさず、

「日 瓢さんか、ナニ風邪じゃあねえ、フテ寝というのよ。まあ上るがいい。」

とは云いたれど上りてもらいたくも無さそうな顔なり。

「ハハハ、運を寝て待つつもりかネ、上つてもご馳走は無さそうだ。」

「違えねえ、煙草の火ぐらいなもんだ。」

「ハハハ、これではお互に浮べれない。時に明日の晩からは柳原の例のところに○

州屋の乾分の、ええと、誰とやらの手で始まるそうだ、菓子屋の源に昨日そう聞いたが

一 緒に行きなさらぬか。

「往かれたら往こうわ、ムムそれを云いに来たのか。」

「そうさ、お互に少し中り屋さんにならねばならん。」

「誰だつてそうおもわねえものは無えんだ、御祖師様でも頼みなせえ。」

「からかいなさるな、罰が当たっているほうだ。」

「ハハハ、からかいなささんなど云つてもらいてえ、どうも言語の叮嚀な中がいい。」

「ガリスの果と知れるかノ。

「オヤ、氣障な言語を知ってるな、大笑いだ。しかし、知れるかノというノの字で打壊しだあナ、チヨタのガリスのおん果とは誰が眼にも見えなくってどうするものか。

「チヨタとは何だ、田舎漢のことかネ。

「ムム。

「忌々しい、そう思われるが厭だによつて、大分氣をつけているが地金はとかく出たがるものだナ。

「ハハハ、厭だによつてか、ソレそれがもういけねえ、ハハハ詰らねえ色氣を出したもんだ。

「イヤ居れば居るだけ笑われる、明日来てみよう、行かれたら一緒に行きなさい。

と立帰り行くを見送つて、

「おえねえ頓痴奇だ、坊主ツ返りの田舎漢の癖に相場も天賽も氣が強え、あれでもやつぱり取られるつもりじゃあねえ中が可笑い。ハハハ、いい業ざらした。

と一人笑うところへ、女房おとまぶらりツと帰り来る。見れば酒も持たず豆腐も持たず。

「オイどうしたんだ。

「どうもしないよ。」

やはり寝ながらじろりツと見て、

「気のぬけたラムネのように異うすますナ、出て行つた用はどうしたんだ。」

「アイ忘れたよ。」

「ふざけやがるなこの婆ばばあ。」

「邪見じやけんな口のききようだねえ、阿魔だのコン畜生だの婆だのと、れつきとした内室おかみさんをつかめえてお慮外りよがいだよ、兀はげちよろ爺じいの蹙足いざりじい爺め。」

と少し甘あまえて言う。男は年も三十一二、頭髪かみは漆うるしのごとく真黒まっくろにて、いやらしく手を入れ油あぶらをつけなどしたるにはあらで、短かめに苳かりたるままなるが人に優すぐれて見好きよなり。されば兀はげちよろ爺ののしと罵ののしりたるはわざとになるべく、蹙足いざりじい爺めとはいつまでも起き出でぬ故なるべし。男は罵ののしられても激はげしくは怒おこらず、かえつて茶にした風にて、

「やかましいやい、ほんとに酒はどうしたんでエ。」

「こうしてから飲むがいいサ。」

と突然だしぬけに夜具ひつばを引剥ひぐ。夫婦ふうふの間とはいえ男はさすが狼狙うろたえて、女房にようばの笑うに我からも噴飯ふきだしながら衣類きものを着る時、酒屋さかやの丁稚てうち、

「ハイお内室かみさんここへ置きます、お豆腐は流しへ置きますよ。

と徳利とくりと味噌瀉みそぢを置いて行くは、此家ここの内儀かみさんにいつつけられたるなるべし。

「さあ、お前はお湯ぶうへいつておいでよ、その間にチャンとしておくから。

手拭てぬぐいと二銭銅貨を男に渡す。片手には今手拭を取った次手ついでに取った帚ほうきをもう持つてい  
る。

「ありがてえ、昔時むかしからテキパキした奴やつだったツケ、イヨ鼻かか大あ明だい神みょうじん。

と小声で囁はやして後あとでチヨイと舌を出す。

「シトヲ、馬鹿ばかにするにも程ほどがあるよ。

大明神まゆ眉まゆを皺しわめてちよいと睨にらんで、思い切つて強ひどく帚ほうきで足を薙なぎたまう。

「こんべらぼうめ。

男は笑つて呵しかりながら出で行く。

## その二

浴後ゆあがりの顔色さへぎえ冴さ々ざしく、どこに貧乏の苦があるかという容態ありさまにて男は帰り来る。一

体にが苦み走りて眼尻めしりにたるみ無く、一の字口の少し大なるもきつと締りたるにかえつて男ら  
 しく、娘にはいかなれど浮世うきよの鹹味からみを嘗めて来た女には好かるべきところある肌合はだあいな  
 り。あたりを片付け鉄瓶てつびんに湯も沸らせ、火鉢ひばちも拭いてしまいたる女房おとま、片膝立  
 てながら疎い齒あらの黄楊つげの櫛くしで邪見じやけんに頸足えりあしのそそけを搔かき撫なでている。両袖りようそでまくれ  
 てさすがに肉付にくつきの悪からぬ二の腕うでまで見ゆ。髪はこの手合てあいにお定まりのようなお手製の  
 櫛巻なれど、身だしなみを捨てぬに、小官吏こやくにんの細君さいくんなどが四銭の丸鬘まるまげを二十日も保  
 たせたるよりは遙はるかに見よげなるも、どこかに一時は磨みがき立たてたる光の残れるが助たすけをなせるな  
 るべし。亭主の帰り来りしを見て急に立上り、

「さあ、ここへおいで。」

と坐ぎを与あたう。男は無言で坐り込み、筒湯つつゆのみ呑のみ湯をついで一杯飲いっぱいむ。夜食膳やしよくぜんと云いな  
 らわした卑しい式かたの膳ぜんが出て来る。上には飯茶碗めしちやわんが二つ、箸箱はしばこは一つ、猪口ちよくが二つと  
 香こうのもの鉢ばちは一ツと置ならべられたり。片口は無いと見えて山形に五の字の描かかれた一  
 升しょうどくり徳利は火鉢の横に侍坐しじざせしめられ、駕籠屋かごやの腕と云つては時代違ちがいの見立となれど、  
 文身ほりものの様に雲竜うんりゆうなどの模様もようがつぶつぶで記された型絵かんどくりの爛徳利らんどくりは女の左の手に、  
 いずれ内部なかは磁器せどもぐすりのかかつていようという薄鍋うすなべが脆もろげな鉄線耳はりがねみみを右の手につ

ままれて出で来る。この段取の間、男は背後の戸棚に憑りながらぼかりぼかり煙草をふかしながら、腮のあたりの飛毛を人さし指の先へちよと灰をつけては、いたずら半分に抜いている。女が鉄瓶を小さい方の五徳へ移せば男は酒を爛徳利に移す、女が鉄瓶の蓋を取る、ぐいと雲竜を沈ませる、危く鉄瓶の口へ顔を出した湯が跳り出しもし得ず引退んだり出たりしている間に鍋は火にかけられる。

「下の抽斗に鯉節があるから。」

と女は云いながら立つて台所へ出でしが、つと外へ行く。

「チョツ、削けといやあがるのか。」

と不足らしい顔つきして女を見送りしが、何が眼につきしや急にシヨゲで黙然になつて抽斗を開け、小刀と鯉節とを取り出したる男は、鯉節の亀節という小さいものなるを見て、

「ケチびんなものを買つときあがる。」

と独言しつそこらを見廻して、やがて膳の縁へ鯉節をあてがつて削ぐ。

女はたちまち帰り来りしが、前掛の下より現われて膳に上せし小鉢には蜜漬の辣薑少し盛られて、その臭気烈しく立ち渡れり。男はこれに構わず、膳の上に散りし削た

る鯉節を鍋の中に摘み込んで猪口を手にす。注ぐ、呑む。

「いいかエ。

「素敵だツ、やんねえ。

女も手酌で、きゆうと遣つて、その後徳利を膳に置く。男は愉快気に重ねて、

「ああ、いい酒だ、サルチルサンで甘え瓶つめとは訳が違う。

「ほめてでももらわなくちやあ埋らないヨ、五十五銭というんだもの。

「何でも高くなりやあがる、ありがてえ世界だ、月に百両じやあ食えねえようになるんでなくツちやあ面白くねえ。

「そりやあどういう理屈だネ。

「一揆がはじまりやあ占めたもんだ。

「下らないことをお言いで無い、そうすりやあ汝はどうするとうんだエ。

「構うことあ無えやナ、岩崎でも三井でも敲き毀して酒の下物にしてくれらあ。

「酔いもしない中からひどい管だねエ、バアジンへ押込んで煙草三本拾う方じやあ無いか

エ、ホホホホ。

「馬鹿あ吐かせ、三銭の恨で執念をひく亡者の女房じやあ汝だつてちと役不足だろ

うじやあ無えか、ハハハハ。

「そうさネエ、まあ朝酒は吞ましてやられないネ。

「ハハハ、いいことを云やあがる、そう云わずとも恩には被らあナ。

「何を工。

「今飲んでる酒をヨ。

「なぜサ。

「なぜでもいいわい、ただ美味えということよ。

「オヤ、おハムキか工、馬鹿らしい。

「そうじやあ無えが忘れねえと云うんだい、こう煎じつめた揚句に汝の身の皮を飲んでるのなもの。

「弱いことをお云いだね工、がらに無いヨ。

「だつてこうなつてからというものア運とは云いながら為ることも為ることもどじを踏んで、旨え酒一つ飲ませようじやあ無し面白い目一つ見せようじやあ無し、おまけに先月あらいらいざらい何もかも無くしてしまつてからあ、寒蜚の悪く啼きやあがるのに、よじりもじりのその絞衣一つにしたツ放しで、小遣錢も置いて行かずに昨夜まで六日七日帰りや

あせず、売るものが留守に在ろうはずは無し、どうしているか知らねえが、それでも帰る  
 に若干銭か握んで家へ入えるならまだしもというところを、銭に縁のあるものア欠片も持  
 たず空腹アかかえて、オイ飯を食わしてくれろつてえんで帰つての今朝、自暴に一  
 杯引掛けようと云やあ、大方男児は外へも出るに風帯が無くつちやあと云うところか  
 らのことでもあろうが、プツツリとばかりも文句無しで自己が締めた帯を外して来ての正  
 宗にやあ、さすがのおれも刳られたア。今ちよいと外面へ汝が立つて出て行つた背  
 影をふと見りやあ、暴れた生活をしているたア誰が眼にも見えてた繻子の帯、燧寸の箱  
 のようなこんな家に居るにやあ似合わねえが過日まで贅をやつた名残を見せて、今の  
 今まで締めてたのが無くなつている背つきの淋しさが、厭あに眼に浸みて、馬鹿馬鹿しい  
 がホロリツとなつたア。世帯もこれで幾度か持つては毀し持つては毀し、女房も七  
 度持つて七度出したが、こんな酒はまだ呑まなかつた。

「何だネエ汝は、朝ツぱらから老実つくさいことをお言いだネ。  
 「ハハハ、そうよ、異に後生気になつたもんだ。寿命が尽きる前にやあ気が弱くな  
 るというが、我アひよつとすると死際が近くなつたかしらん。これで死んだ日にやあい  
 意気地無しだ。

「縁起えんぎの悪いことお云いでないよ、面白くもない。そんなことを云っているより勢いよくサツと飲んで、そしていい考案かんがえでも出してくれなくちゃあ困るよ。」

「いいサ、飲むことはこの通りお達者だ、案じなさんな。児こを棄すてる日になりやア金の茶ち釜やがまも出て来るてえのが天運だ、大丈夫だいじょうぶ、銭が無くって滅入めいってしまふような伯父おじさんじゃあねえわ。」

「じゃあ何かいい見込みこみでも立ってるのかエ。」

「ナアニ、ちつとも立ってねえのヨ。」

「どうしたらそういい気になつていられるだろうネ。仕様が無いネエ、どうかしておくれで無くつちやあわたしももうしようも有りやあしないヨ。」

「ナアニ、いよいよ仕様が無けりやあ、またちよいと書く法もあらア。」

「どうおしなのだエ。」

「強盗ごうとうと出かけるんだ。」

「智慧ちえが無いねエ、ホホホホ。詰らない洒落しゃればかり云わずと真実ほんとにサ。」

「真実ほんとに遣付けようかと思つてるんだ。オイ、三年の恋こいも醒さめるかナツ、ハハハ。」

「冗談じょうだんを云わずと真誠ほんとに、これから前まへをどうするんだか談はなして安心さしておくれなネ。」

工。茶かされるナア腹が立つよ、ひとが心配しているのに。

「心配は廃よしやアナ。心配てえものは智慧袋ちえぶくろの縮み目の皺しわだとヨ、何にもなりやあしねえわ。

「だつて女の気じやあいくらわたしが気さくもんでも、食べるもん無し売るもんなしとなるのが眼に見えてちやあ心配せずじやあいられないやネ。

「ご道理もつとも 千せん万ばんに違ちげえねえ、これから売うるものア汝てめえの身体からだより他にやあ無ねえんだ。おれの身体でも売れるといいいんだが、野郎おかみと来ちやあ政府おかみへでも売うりつけるより仕様がねえ、ところでおれ様と来ちやあ政府おかみでも買かい切れめえじやあねえか。川岸かし女郎じよろうになる気で台た湾いわんへ行くのアイいけれど、前ぜん借しやくで若干なにがし銭ぜんか取れるというような洒落しやくた訳わけにやあ行いかずヨ、どうも我あながら愛想あいその尽つきる仕義しぎだ。

「そんな事をいつてどうするんだ工。

「どうするツてどうもなりやあしねえ、裸はだか体たになつて寝ねているばかりヨ。塵埃ほこりが積たかる時とき分にやあ掘出ぎし気きのある半可はんかつう通つうが、時代じだいのついでるところが有あり難がたえなんてえんで買かつて行くか知れねえ、ハハハ。白はく丁ちよう奴め軽かくなつたナ。

「ほんとに人を馬鹿ばかにしてるね。わたしを何だとおもつておいでのだ工、こつちは馬鹿ばかな

ら馬鹿なりに気を揉んでるのに、何もかも茶にして済ましているたあ余り人を袖にするというものじゃあ無いか工。

と少しつんとして、じれったそうにグイと飲む。酒の廻りしたため面に紅色さしたるが、一体醜からぬ上年齡も葉桜の匂無くなりしというまでならねば、女振り十段も先刻より上りて婀娜ツばいいいい年増なり。

「そう悪く取つちやあいけね工。そんなら実の事を云おうか、実はナ。

「アアどうするツて工の。

「実はナ。ほんとうの事を云やあ、ナ。

「アアどうするツて工のだツていうのにサ。

「工工糞ツ、忌々しいが云つてしまおう。実は過日家を出てから、もうとても今じやあほんとの事ア遣てる間がねえから汝に算段させたんで、合百も遣りやあ天骰子もやる、花も引きやあ樗蒲一もやる、抜目なくチーハも買う富籤も買う。遣らねえものは燧木の賭博で椋鳥を引つかける事ばかり。その中にやあ勝ちもした負けもした、いい時や三百四百も握つたが半日たあ続かねえでトドのつまりが、残つたものア空財布の中に富籤の札一枚だ。こいつあ明日になりやあ勝負がつくのだ、どうせ無益にやあ極つてるが明日

行つて見ねえ中は楽しみがある、これよりほかに当は無えんだ。オイ軽蔑めえぜ、馬鹿なものを買ったのも詮じつめりやあ、相場をするのと差はねえのだ、当らねえには極まらねえわサ。もうこうなつちやあ智慧も何も、有つたところで役に立たねえ、有体に白状すりやこんなもんだ。

女房は眉を皺めながら、

「それもそうだろうが汝<sup>おまい</sup>そうして当らない時はどうするつもりだ工。

「ハハハ、どうもならねえそう聞かれちやあ。生きてる中はどうかこうか食わずにやあいねえものだ、構うものかい。だから裸で寝ていようというんだ。愛想が尽きたか、可愛<sup>かわいそ</sup>想<sup>う</sup>な。厭<sup>いや</sup>気がさしたらこの野郎に早く見切をつけやあナ、惜いもんだが別れてやらあ。

汝<sup>てめえ</sup>が未<sup>このさき</sup>来<sup>き</sup>に持っている果報の邪魔はおれはしねえ、辛<sup>つら</sup>いと汝<sup>おまい</sup>が《てめえ》がおもうなら辛<sup>つら</sup>いつきあいはさせたくねえから。

とさすが快活な男も少し鼻声になりながらなお酔<sup>よ</sup>に紛<sup>まぎ</sup>らして勢よく云う。味わえば情も薄<sup>うす</sup>からぬ言葉なり。女は物も云わず、修<sup>しゆ</sup>行<sup>ぎやう</sup>を積んだものか泣きもせず、ジロリと男を見たるばかり、怒った様子にもあらず、ただ真面目になりたるのみ。

男なお語をつづけて、

「それともこう云つちやあ少しウヌだが、貧すりや鈍になつたように自分でせえおもうこのおれを捨ててくれねえけりやア、真の事たあ、明日の富に当らねえが最期おらあ強盜になろうとももうこれからア榮華をさせらあ。チイツと覺悟をし直してこれからの世を渡つて行きやあ、二度と汝に錢金の苦勞はさせねえ。まだこの世界は金銭が落ちてる、大層くさくどこへ行つても金金と吐しやあがつてピリついてるが、おれの眼で見りやあ狗の尿より金はたくさんにころがつてらア。ただ狗の尿を拾う氣になつて手を出しやあ攫取りだ、真の事たあ、馬鹿な世界だ。

「訳が解らないよ汝の云うことア、やつぱり強盜におなりだといふのかエ。

「馬鹿ア云え、強盜になりやアどうなるとおもう。

「赤い衣服を着る結局が汝のトドの望なのかエ、お茶人過ぎるじやあ無いか。

「赤い衣服ア善人だから被せられるんだ。そんなケチなのとアちと違うんだが、おれが強盜になりや汝はどうする。

「厭だよ、そんな下らないことを云つては、お隣家だつて聞いているヨ。

「隣家で聞いたつて巡查が聞いたつて、談話だい、構うもんか、オイどうする。

「おふぎけで無いよ馬鹿馬鹿しい。

と今は一切受けぬ語気。男はこの様子を見て四方をきつと見廻しながら、火鉢越に女の顔近く我顔を出して、極めて低き声ひそひそと、

「そんなら汝、おれが一昨日盗賊をして来たんならどうするつもりだ。

と四隣へ気を兼ねながら耳語き告ぐ。さすがの女ギョツとして身を退きしが、四隣を見まわしてさて男の面をジツと見、その様子をつくづく見る眼に涙をにじませて、恐る恐る顔を男の顔へ近々と付けて、いよいよ小声に、

「金さん汝情無い、わたしにそんなことを聞かなくちやアならない事をしておくれか工。

工、工、工。

「ム、ム、マアいいやナ、してもしねえでも。ただ汝の返辞が聞きてえのだ。

「どうしても汝聞きたいのか工。

女の唇は堅く結ばれ、その眼は重々しく静かに据り、その姿勢はきつと正され、その面は深く沈める必死の勇氣に満されたり。男は萎れきつたる様子になりて、

「マア、聞きてえとおもつてもらおう。おらあ汝の運は汝に任せてえ、おらが横車を云おう気は持たねえ、正直に隠さず云つてくれ。

女はグイとまた仰飲つて、冷然として云い放つた。

「何が何でもわたしやアいいよ、首になつても列ぼうわね。

面は火のように、眼は耀くように見えながら涙はぼろりと膝に落ちたり。男は臂を伸してその頸にかけ、我を忘れたるごとく抱き締めつ、

「ムム、ありがてえ、アツハハハハ、ナニ、冗談だあナ。べらぼうめえ、貧乏したつて誰が馬鹿なことをしてなるものか。ああ明日の富籤に当りてえナ、千両取れりやあ氣息がつけらあ。エエ酒が無えか、さあ今度アこれ売つて来い。構うもんかい、構うもんかい、当らあ当らあきつと当らあ。

とヒラリと素裸になつて、寝衣に着かえてしまつて、

やぼならこうした うきめはせまじ、

と無間の鐘のめりやすを、どこで聞きかじつてか中音に唸り出す。

(明治三十年十月)





# 青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 幸田露伴」筑摩書房

1992（平成4）年3月20日第1刷発行

底本の親本：「現代日本文学全集」筑摩書房

※閉じ括弧なしはすべて、底本通りです。

入力：林 幸雄

校正：門田裕志

2002年12月5日作成

2011年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 貧乏

幸田露伴

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>